

彫刻をさわる時間

－屋外彫刻の保存と活用をめぐり－

東海大学松前記念館 篠原 聰

はじめに

旧広島駅ビル壁面にあった舟越保武の彫刻が同ビルの建て替え工事に伴い廃棄されていたことは記憶に新しい。大阪でも咲洲庁舎の地下駐車場に大阪府所蔵の105点の彫刻が放置され、その管理のあり方が批判された。北海道でも市民が寄贈した北海道開拓時代の民具など約600点の郷土資料を自治体が無断で処分し、市民団体が抗議しているとの報道がなされた¹。いずれのケースも、それぞれに事情はあるのだろうけれど、作品や資料を管理運営する民間企業や自治体と、作品の作り手や寄贈者との信頼関係が薄れていたこと、両者の間でしっかりとコミュニケーションがとれていなかったのは事実だろう。これらの報道は、現代において芸術や文化を後世に守り伝えることの難しさを伝えている。民間・自治体、中央・地方を問わず、文化芸術の保存や活用のあり方が全国的に問い直されている、と言い換えてもよい。

1980年代以降、各自治体の周年事業などで「彫刻のあるまちづくり」事業が採用された。バブル期をピークに全国の自治体に設置された屋外彫刻も現在、危機的状況にある²。美術館の敷地内にある屋外彫刻は、博物館の専門的職員である学芸員がそれらの保存活動に取り組んでいるケースも多いが、敷地を一步でも外にでると、例えば、自治体の公園内にある屋外彫刻であれば自治体の公園課が、歩道にある彫刻は道路課が、といったように、屋外彫刻はその設置された場所ごとに管理する自治体の部署が異なり、またそれらの部署に美術作品の保存に関する知識を持つ職員が配属されていることは皆無に等しい。都市計画の変更に伴う屋外彫刻の移設も多く、移設時に管理部署が変わることで、設置当時の資料などが失われてしまうケースもある。屋外彫刻の多くが石やブロンズなどのかたい素材で造られているため、劣化しないのではないかと思います。思い込まれているケースもある。こうした思い込みは自治体職員に限らず一般

市民においても言えることである。確かに石やブロンズなどは頑丈な素材だが、例えば耐候性のあるコルテン鋼を用いた彫刻にサビの層が発生したりするなど、屋外彫刻といえどもしっかりとメンテナンスしないと劣化し、最終的には倒壊してしまう恐れもある。本稿では、屋外彫刻の保存と活用に関する取り組み事例として、東海大学松前記念館（歴史と未来の博物館）の実践事例や「彫刻をさわる時間」と題する一連の活動を紹介する。

1. 東海大学湘南キャンパスの屋外彫刻

東海大学湘南キャンパスには以下の5つの屋外彫刻がある。①《星を仰ぐ青年の像》、②《山田守胸像》、③《松前重義胸像》、④《松前重義立像》、⑤《人魚姫の像》。①と②の作者は舟越保武(1912-2002)で、1958年制作の①は代々木校舎に設置された後、1972年に湘南校舎の1号館前から噴水にかけての傾斜面に移設され、1988年に現在の総合体育館前に置かれた。②の制作年は1967年で、像主の山田守は湘南校舎のデザインを手がけた分離派の建築家。③の作者は北村西望(1884-1987)で、像主は東海大学の創立者。松前記念館が開館した1983年に同館前に設置された。④の作者は富永直樹(1913-2006)で制作年は1990年(1991年に設置)。⑤の作者はデンマークの彫刻家で、コペンハーゲンの《人魚姫の像》の作者として知られるエドヴァルド・エリクセン(1876-1959)。本像は《人魚姫の像》の1/2スケールの作品で、1971年にデンマーク・コペンハーゲン市から寄贈され、東海大学社会教育センター三保文化ランド(静岡市清水区)に設置された後、同ランドの閉園に伴い2001年に湘南キャンパスに移設された。

このように、湘南キャンパスの事例でも、設置当初から場所が変わらないのは②③④のみで、①⑤のように校舎間やキャンパス内で移設されたケースがみられる。いずれも屋外にあるため、①は65年、②は61年、⑤は52年、③は40年、④は33年

の風雪に耐えてきたことになる。④については過去に数回メンテナンスされているようだが、それ以外の作品については事務課にも過去の修復やメンテナンスの記録は残されていない。尚、足場を組まなければメンテナンスが不可能な④については、2017年の創立75周年記念事業の一環として公開メンテナンスを実施した。また、③については石膏原型が鋳造所の黒谷美術（富山県）に保管されていることが判明し、寄贈を受け、現在は館内で展示している。①についても石膏原型が学内に保管されていたこと、当該原型が1958年開催の第3回現代日本美術展に《青年立像》という作品名で出品されていたことなどが当時学生だった野城今日子氏（現・渋谷区立松濤美術館学芸員）の調査で判明した³。鋳造のために胴体と両腕が切断された状態で保管されていたが、過去の展覧会出品作であり、また石膏第一原型でもあることに鑑み、ブロンズスタジオに修復を依頼し、現在は館内で展示している。

2. 松前記念館の事例（彫刻を触る☆体験ツアー）

松前記念館でキャンパス内の屋外彫刻のメンテナンスを開始したのは2014年である。当初は館内に設置したハンズ・オン（触る）展示の関連イベント「“触る”体験ワークショップ」として、溶解炉を用いてブロンズが溶けていく様子を見学したのちにブロンズのペンダントを制作するワークショップや、洗浄作業を通じて屋外彫刻を触る体験イベントなどを実施していたが、2015年以降は「彫刻を触る☆体験ツアー」と題して、大分大学の事例⁴をモデルに、屋外彫刻のメンテナンスに特化した活動に一本化した。学内に屋外彫刻の保存を担当できる部署がないため、博物館相当施設である松前記念館が学芸員課程と連携してその保存と活用の責務を担うこととした。参加者は、学芸員課程の学生を中心に、自治体の職員やボランティア団体が参加し、回を重ねるごとに学芸員や研究者、地域住民なども加わり、神奈川県高校生インターンシップに登録してからは県内の高校生も毎回数名参加し、世代間交流の学びの場にもなっている。また、参加者の関心を高めるために、毎回、彫刻の歴史や触る美術鑑賞などに関する特別レクチャーも取り入れ、これまでに自治体職員、学芸員、研究者、大学教員などをゲストスピーカーと

して招聘している。

さて、彫刻メンテナンスは、彫刻作品の健康診断（状態点検）にはじまり、①洗浄作業、②ワックス作業、③光沢調整作業、の流れを基本とし、最後に行うメンテナンス作業の振り返りにもしっかりと時間を割いている⁵。作品の保存活動であるメンテナンスは「手」でおこなうため、彫刻作品を触って鑑賞する絶好の機会でもあり、保存と活用を両立した学びのプログラムとして展開できる⁶。実際、自らの手で汚れを落とし、ワックスがけをして磨いてみると、作品に愛情、愛着がわくもので、参加者からは毎回、「メンテナンス前と後で顔の表情が優しくなった」といった感想が寄せられている。イベントの定員は原則、20名以内とし、現在は《松前重義胸像》と《山田守胸像》を二手に分かれてメンテナンスし、最後に《人魚姫の像》の洗浄を行っている。作業時間は特別レクチャーを含め、10時から16時（お昼休憩1時間）の5時間である。尚、《人魚姫の像》は1971年から2001年までの30年間、海辺に近い清水キャンパスに設置されていたため、作品の保存状態に鑑み洗浄作業のみとし、ワックスがけはしていない。また、《星を仰ぐ青年の像》については、1988年から噴水内に設置されていたこともあり、噴水の影響で台座と像とを固定するボルトが腐食し（図1）、倒壊の恐れがあるため、現在、メンテナンスは実施しておらず、クラウドファンディング等による修復を計画している。

本取り組みは秦野市と連携した市内の屋外彫刻の定期メンテナンスにもつながり、近年では藤沢市「彫刻ピカピカプロジェクト」や小田原市「お



図1 《星を仰ぐ青年の像》
固定ボルトの腐食による破断



図2 『朝日新聞』 2022年10月1日付記事

だわら市民学校」、東京都北区「彫刻を目と手でさわってみよう」などの活動に拡がりをみせている。また、2022年には神奈川県との連携「ともいきアートサポート事業」の一環で、平塚市美術館の協力を得て、平塚盲学校の児童・生徒とともに同美術館内外の彫刻3点のメンテナンスも実施した（図2）。

3. 大分大学の事例（彫刻をさわる時間）

大学と自治体との連携により大分市内にある屋外彫刻のメンテナンス方式を確立し、長年、同市内の彫刻メンテナンスに取り組んできた大分大学の田中修二氏が近年力を入れているのが「彫刻をさわる時間」をつくることである。「彫刻をさわる時間」は大分大学、大分県立盲学校、おおいた障がい者文化支援センター、大分市などとの連携事業の大枠のタイトルである。2020年3月に企画した「遊歩公園の屋外彫刻をさわって/みる 鑑賞会・シンポジウム」が最初で、この時はCOVID-19のパンデミックにより鑑賞会は中止したが、「彫刻に触る鑑賞の可能性 屋外彫刻作品の活用とともに」と題するシンポジウムを開催した。2021年には「彫刻をさわる場所をつくる」と題して大分県立盲学校にて鑑賞支援ワークショップ（一般非公開）とシンポジウムを開催、ワークショップでは黒川弘毅氏や村上祐介氏の彫刻作品を教室内に展示し、児童・生徒が鑑賞した。2022年は講師に彫刻家の高見直宏氏を招聘し、ワークショップとシンポジ



図3 「彫刻をさわる時間」チラシ

ウム「彫刻を『つくる』『さわる』」を開催、いずれも大分市内の遊歩公園内に設置された屋外彫刻の鑑賞会も実施した。2023年も7月に大分県立美術館で開催された企画展「朝倉文夫生誕140周年記念 猫と巡る140年、そして現在」の関連イベントとして彫刻をさわって鑑賞するワークショップを実施し（図3）、11月には筑波大学の宮坂慎司氏を招聘し、大分県立盲学校でワークショップを実施するとともに「彫刻をさわる歴史を遡る」と題するシンポジウムを開催した。

4. まとめ

「彫刻に触る☆体験ツアー」と「彫刻をさわる時間」に共通する主催者側の問題意識は、廃棄の危険性に常に晒されながら劣化の一途をたどる屋外彫刻の保存と、その保存活動の担い手の育成にある。いずれも盲学校との連携を導入しているのは、視覚障害者の美術鑑賞の機会を単に創出するだけでなく、視覚障害者から優しく丁寧に触る方法を、目が見える人が学ぶためでもある。全盲の広瀬浩二郎氏を毎回、講師として招聘しているの

もそのため、手で触るという営みが、触る対象、モノに対する愛情、愛着を育むという視点を大切にしている。「触覚」による鑑賞は、対象の新たな魅力の発見にもつながるだろう。合理的・効率的に生産されたモノを目で見て大量に消費する時代から、本当に大切なモノを手で触って楽しみ、肌で感じながら大切に守り伝えていく、そうした考え方が地域の文化芸術の継承には必要だろう。「彫刻をさわる時間」は、地域の文化芸術を守り伝える担い手の育成のための第一歩でもある。

付記

屋外彫刻の保存やメンテナンスのことでお困りのことがございましたら、東海大学松前記念館までご一報いただければ幸いです。

註

- 1 「旧広島駅ビルの壁面飾り55年 舟越保武さんの彫刻作品を廃棄 2020年の建て替え時に」(『中國新聞(デジタル)』2023.7.17)、「大阪府が地下駐車場に保管の美術品 2.2億円分 一時的に別の施設へ」(『朝日新聞デジタル』2023.8.18)、「市民寄贈の郷土資料を無断で処分 市民団体が抗議 北海道江別市」(『毎日新聞(デジタル)』2023.10.29)。
 - 2 勝山滋「野外彫刻は再び死ぬのか、あるいは一」(『美術の窓』481,生活の友社,2023.10) 参照。
 - 3 野城今日子・篠原聡「公開修復へ 舟越保武作《星を仰ぐ青年の像》石膏原型の保存修復について」(『第38回大会 研究発表要旨集』文化財保存修復学会,2016) 参照。
 - 4 篠崎未来・田中修二「大分市の屋外彫刻メンテナンス活動について—大学と自治体の連携から—」(『アートマネジメント研究』10号、アートマネジメント学会,2009年) 参照。
 - 5 手引書として『屋外彫刻メンテナンスハンドブック』(大分大学教育学部田中修二研究室,2021年)が屋外彫刻のメンテナンス方法等を分かりやすく紹介している。
 - 6 普及事業の一環として、2016年からは彫刻の保存と活用をテーマとした以下の公開シンポジウムも開催した。「彫刻とエロス 目と手で育むユニバーサル・ミュージアムの未来(2016)」、「彫刻と生きる 人類とブロンズの歴史、そして、(2017)」、「岐路に立つ彫刻 湘南ひらつか野外彫刻展のゆくえ(2018)」、「持続可能な彫刻 アートが拓くユニバーサルな可能性(2019)」。
- 尚、シンポジウムの報告書は以下のアドレスからダウンロード可能 (<https://researchmap.jp/jetmilk/works>)。